

「祇王・Guiuō」を巡って 2

市井外喜子 (大東文化大学名誉教授)

A Study of “Guiuō” 2

Tokiko ICHII

要旨 古典平家物語（高野本）「祇王」章段には、私の用いる自称詞「わらは」、清盛・祇王の母・祇王・仏等のそれぞれの間で用いられる対称詞「わごぜ・(わごぜたち)」が見られる。自称詞わらは、対称詞わごぜ(わごぜたち)は、状況に影響されることなく、わらは・わごぜである。一方天草版平家物語「Guiuō」章段には、私の自称詞は「varaua」に加え、新しく「vatacuxi」が用いられている。祇王—仏間の対称詞には、「わごぜ」が新しい「jonata」へと変化を見せている。「祇王」章段から、「Guiuō」章段への、時代の新しい空気を人称詞（自称詞・対称詞）が担っている様子を吟味した。

1 はじめに

『大東文化大学紀要』人文科学 第54号（2016年3月）に、「祇王・Guiuō」を巡って を報告した。

古典平家物語（高野本）巻第一に位置する「祇王」章段が、天草版平家物語では巻第二冒頭に、「祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと」（以降、Guiuō章段とする）として位置を占めている。この古典平家物語から天草版平家物語への「祇王」章段→「Guiuō」章段の位置の大移行は、編者不干ハビヤンの意図によるものと見て、その必然性を吟味したものである。

今回も同じく「祇王」章段をとりあげ、「Guiuō」章段との比較を人称詞（自称詞・対称詞）から吟味することにする。編者不干ハビヤンの自称詞・対称詞の選択の妙に注目したい。

『天草版平家物語』は、1592年イエズス会天草学林から出版され、原本名を『日本の言葉とHistoriaを習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語。(FEIQE NO MONOGATARI)』とするものである。

それは聞き手兼進行役をつとめる右馬の允 (VM.) と、話し手の喜一検校 (QI.) が「兩人相對し

て雑談をなすがごとく」にこの編纂目標にしたがって、「検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ」と右馬の允が請い、喜一が「やすいことござる：をうかた語りまらしょうず。」と受けて、平家物語の大略を、当時の話し言葉によって語る（対話形式）ものである。これがキリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための日本文化・日本語学習のテキストである。

さて吟味の対象とするのは、仏の用いる自称詞「vatacuxi」、祇王・仏間で用いられる対称詞「fonata」である。自称詞「わらは」が、新しい「vatacuxi」へと変化し、対称詞「わごぜ」が新しい「fonata」を選ぶ『天草版平家物語』に注目する。

使用する平家物語は、次のものである。

- 古典平家（高野本）：梶原正昭・山下宏明校注（1991・93）『平家物語上・下』新日本古典文学大系 岩波書店
- 天草版平家：江口正弘（1986）『天草版平家物語 対照本文及び総索引』明治書院

2 「祇王・Guiuō」章段の人称詞（自称詞・対称詞）

自称詞・対称詞を見るために「祇王」章段を三区分にし、区分ごとに見られる人称詞を吟味する。人称詞の例示は常に古典平家・天草版平家の順とし、天草版平家の人称詞は（ ）内にローマ字で示す。

第一区分

[仏、西八条へ推参するも、清盛は対面を拒否する。祇王がとりなし、対面がかなう。仏は今様を歌い、舞も舞う。]

仏：我（vare）天下に聞えたれ共、当時さしもめでたう栄へさせ給ふ平家太政の入道殿へ召されぬ事こそ本意なけれ。

古典平家仏の自称詞「われ」は、天草版平家においても「vare」となり、変化がない。

仏の「われ（vare）」は、横笛の「われ」に重なる。若い女性の意志的な行動力が見られる。横笛の例を示す。

- われをこそ捨てめ、さまをさへかへけむ事のうらめッしきよ。たとひ世をばそむくとも、などかかく知らせざらむ。人こそこころづよくとも、たづねて恨みむ（巻第十横笛）

天草版平家 vare をこそ捨ちようずれ、また様をまで変えたことの無慚さよ：たとい世をこそ厭うとも、なぜかくて知らせなんだぞ？人こそ心強くとも、たづねて今わ恨みよう（巻第四第十三 小松の三位の中将屋島を出て高野え上らるること：同じく滝口、横笛がこと。）

祇王：わが（vaga）立てし道なれば、人の上ともおほえず。～唯理をまげて、召しかへして御対面さぶらへ

古典平家祇王の自称詞「わが」は、天草版平家においても「vaga」となり、変化がない。

「vaga」は男性も用いる。1例をあげる。

○をのれらは、内府が命をばおもうして、入道が仰をばかろうしけるござんなれ。(巻第二 小教訓)

天草版平家(清盛→経遠・兼康)をのれらわ重盛が命をば重んじて、vaga 言うことをばかろしむるか?(巻第一第三 成親卿位あらそいゆえに、平家に対し謀叛を企てられたことが顕れ、その身をはじめ、くみしたほどのもの搦め取られ、そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと)

清盛→祇王:わごぜ(vagoje)があまりに言ふ事なれば、見参してかへさむ

清盛→仏:わごぜ(vagoje)は今様は上手でありけるよ。このぢやうでは、舞もさだめてよかるらむ。

古典平家の対称詞「わごぜ」は、天草版平家においても「vagoje」となり、変化がない。

清盛が祇王、仏に用いる「わごぜ、vagoje」は、『日葡辞書』に言う Vagoje:おまえの意で、話す相手をいくらか軽しめて言うに相当する。

第二区分

[清盛、舞にめで給ひて、仏に心を移されけり:仏の煩悶・祇王の母、祇王へ教訓。]

仏:わらは(vatacuxi)は推参のものにて、出されまいらせさぶらひしを、祇王御前の申しやうによつてこそ、召しかへされてもさぶらふに、

仏:祇王御前を出させ給ひて、わらは(varaua)を一人召し置かれなば、祇王御前の心のうち、はづかしうさぶらふべし。

仏:日比召されぬところでもさぶらはばこそ、是へ召されさぶらへかし。さらずはわらは(vatacuxi)にいとまをたべ。出て見参せん。

古典平家仏の自称詞は、3度とも「わらは」である。一方天草版平家では、vatacuxi—varaua—vatacuxiと、場面の状況に応じて変化をみせている。編者不干ハビヤンの自称詞の配置に工夫が見られる。

仏の「vatacuxi」は、ロドリゲス『日本大文典』の「丁寧な形であって、尊敬し又謙遜して話すのに用ゐる」に相当する。古典平家に見られない新しい自称詞「vatacuxi」である。

祇王母→祇王:わごぜ(vagoje)は、此三とせまで思はれまいらせたれば、ありがたき御情でこそあれ、～縦都を出さるとも、わごぜたち(vagoje tachi)は年若ければ、いかならん岩木のはざまにても過ごさん事やすかるべし。

祇王母→祇王:まことにわごぜ(vagoje)のうらむるもことはりなり。さやうの事あるべしとも知らずして、教訓してまいらせつる事の心憂さよ。但わごぜ(vagoje)身をなげば、いもうとともにも身をなげんと言ふ。

古典平家の対称詞「わごぜ・わごぜたち」は、天草版平家においても「vagoje・vagoje tachi」と、変化が見られない。

祇王母→祇王への対称詞「わごぜ・vagoje」は、第一区分:清盛→祇王・仏の「わごぜ・vagoje」と同一である。

第三区分

〔仏、祇王ら三人が念仏している庵を訪ねる：仏の述懐・決意、祇王の告白〕

仏：もとよりわらは(vatacuxi)は推参のものにて出されまいらせさぶらひしを、祇王御前の中やうによつてこそ召しかへされてもさぶらふに、

古典平家の自称詞「わらは」が、天草版平家では「vatacuxi」に変化をみせている。仏の祇王への述懐・決意を語り始める最初に「vatacuxi」と用いる自称詞は、ロドリゲス『日本大文典』の「丁寧な形であって、尊敬し又謙遜して話すのに用ゐる」に相当している。

仏→祇王：わごぜ(jonata)の出だされ給ひしを見しにつけても(高野本は、この箇所が欠落している。葉子十行本によって補う)

祇王→仏：誠にわごぜ(jonata)の是ほどに思給けるとは、夢にだに知らず。憂き世中のさがなれば、身の憂きところ思ふべきに、ともすればわごぜ(jonata)の事のみうらめしくて、往生の素懐をとげん事かなふべしともおほえず。～今わごぜ(jonata)の出家にくらぶれば、事のかずにもあらざりけり。わごぜ(jonata)はうらみもなし、なげきもなし。

古典平家の仏→祇王への対称詞「わごぜ」1例、祇王→仏への対称詞「わごぜ」4例のすべてが、天草版平家では「jonata」となっている。祇王→仏4例の「jonata」は、祇王が仏を称賛する長い告白の中に見えるものであり、編者不干ハビヤンの工夫の妙をみることができる。若い二人の間で用いられる「jonata」は、新しい時代の風を運ぶものと言える。ロドリゲス『日本大文典』の「第二人称に用ゐるものとして、Sono fō, ConataとともにSonataは、丁寧で広く行はれる」に相当するものである。

以上、見てきた古典平家・天草版平家の自称詞・対称詞を表にまとめて示す。

	自称詞	対称詞	備考
第一区分	仏 われ(vare) 祇王 わが(vaga)	清盛→祇王 わごぜ(vagoje) 清盛→仏 わごぜ(vagoje)	古典平家の自称詞・対称詞を天草版平家も用いる。
第二区分	仏→清盛 わらは(vatacuxi) 仏→清盛 わらは(varaua) 仏→清盛 わらは(vatacuxi)	母→祇王 わごぜ(vagoje) わごぜたち(vagoje tachi) 母→祇王 わごぜ(vagoje) わごぜ(vagoje)	対称詞に変化なし。 わごぜ = vagoje 仏の自称詞に新しいvatacuxiが加わる。 古典平家には自称詞の「わたくし」は見られない。
第三区分	仏→祇王 わらは(vatacuxi)	仏→祇王 わごぜ(jonata) 祇王→仏 わごぜ(jonata) わごぜ(jonata) わごぜ(jonata) わごぜ(jonata)	対称詞に変化あり。 仏→祇王・祇王→仏のjonataは新しい対称詞である。 古典平家には新しい対称詞「そなた」は見られない。

天草版平家の自称詞・対称詞は、()内にローマ字表記で示す。

3 自称詞

古典平家物語・天草版平家物語（祇王・Guiuō 章段を中心にして）の自称詞、「わらは」「varaua」・「vatacuxi」を見ることにする。

古典平家物語（高野本）には、9例の「わらは」が現われる。順次それを示すことにする。

- 1 仏御前、「こはさればなに事さぶらふぞや。もとよりわらはは推参のものにて、出されまいらせさぶらひしを、祇王御前の申しやうによつてこそ、召しかへされてもさぶらふに、（巻第一 祇王）
 - 2 諸共に召し置かれんだにも、心憂ふさぶらふべきに、まして祇王御前を出させ給ひて、わらはを一人召し置かれなば、祇王御前の心のうち、はづかしうさぶらふべし。（巻第一 同上）
 - 3 「あれはいかに、日比召されぬところでもさぶらはばこそ、是へ召されさぶらへかし。さらずはわらはにいとまをたべ。出て見参せん」と申ければ、（巻第一 同上）
 - 4 か様の事申せば、事あたらしうさぶらへ共、申さずは又思ひ知らぬ身ともなりぬべければ、はじめよりして申なり。もとよりわらはは推参のものにて出されまいらせさぶらひしを、祇王御前の申やうによつてこそ、召しかへされてもさぶらふに、（巻第一 同上）
 - 5 をんな、岩屋のくちなた、ずんで聞けば、おほきなるこゑしてによびけり。「わらはこそ是まで尋参りたれ、見参せむ」と言ひければ、（巻第八 緒環）
 - 6・7 そこにひとりとゞまつてなげかんずる事こそ心くるしけれども、わらはが装束のあるをば取つて、いかならん僧にもとらせ、なき人の御菩提をもとぶらひ、わらはが後生をもたすけたまへ。かきをきたる文をば都へつたへてたべ」（巻第九 小宰相身投）
 - 8 滝口入道が声と聞なして、「わらはこそ是までたづね参りたれ。さまのかはりておはすらんをも、今一度見奉らばや」と、具したりける女をもつて言はせれば、（巻第十 横笛）
 - 9 この子がはゝは、これをうむとて、産をばたいらかにしたりしかども、やがてうち臥してなやみしが、「いかなる人の腹に、公達をまうけ給ふとも、思ひかへずして、そだてて、わらはがかたみに御らんぜよ。さしはなつて、めのとなどのもとへつかはすな（巻第十一 副将被斬）
- 「祇王」章段には4例、「小宰相身投」では2例、「緒環」・「横笛」・「副将被斬」では各々1例ずつ、合計9例の「わらは」が全てである。それぞれの章段で、「わらは」と自称するのは女性である。

続いて天草版平家の varaua を比較のために見ることにする。以下に順次示すことにする。

- 1 もろともに召し置かれうさえかたはらいたうござらうずるに、祇王わ出されて、varaua 一人をとどめをかせられれば、なをなを迷惑に存じょうず（巻第二第一 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。）
- 2 二月の十三日夜も更けゆくほどに、北の方乳母の女房にかき口説いて言わるるわ：あわれや明日討ち出うとての夜さしも軍の場に varaua を呼うで、さても通盛がはかない情に都のうち

- を誘われいで、(巻第四第十 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと)
- 3 されば水の底に沈ませられたればとて、ない人を御覧ぜられうことわ難からうず：げにもさやうにござらば、varauaをもいづくまでも召しこそ具せられうずれと、申したれば(巻第四第十 同上)
 - 4 滝口とをばしゅうて、内に念誦の声がしたれば、召し具した女を入れてvarauaこそこれまで尋ねて参つたれと言うて、柴の編戸を叩かせたれば、(巻第四第十三 小松の三位の中将屋島を出て高野え上らるること：同じく滝口、横笛がこと)
 - 5 こののちいかなる人の腹に若君をまうけさせらるるとも、これを育ててvarauaが形見に御覧ぜられい、乳母などのもとえさし離しつかわさるるとあまり言うたが無慚さに、(巻第四第二十二 大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること)

このように天草版平家には5例の「varaua」が用いられ、古典平家と同じく全てその使用者は女性である。

ここで古典平家の「わらは」と、天草版平家の「varaua」の比較を簡条書で示しておくことにする。

- 1 「わらは」を4例出現させた「祇王」章段が、天草版平家「varaua」は、1例しか見られない。3例の「わらは」は、「vatacuxi」に変えられている。それを示しておく。
 - 仏申すわ、こわされば何ごとでござるぞ？もとよりvatacuxiわ推参のもので追いだされまらしようずるを、祇王御前の申し状によってこそ召し帰されてもござるに、
 - 日ごろ召されぬところでもなし、これえ召させられいかし。さないならば、vatacuxiにいとまを下されい。出て見参申さうと言うたれば
 - このやうなことを申せば、こと新しゅうござれども、申さずわまた思い知らぬ身となりまらしようずれば、始よりして申す：もとよりvatacuxiわ推参の者で出されまらしようずるを、祇王御前の申し状によってこそ召しよせられてもござったに、
- 2 「緒環」章段に見られる「わらは」は、緒方の先祖の出自を説く部分に用いられている。天草版平家はその部分を割愛している。したがって「varaua」は出現しない。
- 3 「小宰相身投」では、「わらは」・「varaua」が共に2例ずつ見られるが、引用例文が異なる。天草版平家に対応する「わらは」が見られるのは、新潮日本古典集成(国立国会図書館蔵百二十句本)『平家物語』である。巻第九第九十句 小宰相身投ぐる事に見られるところをそれぞれに示しておく。

2'二月十三日の夜もふけゆくほどに、北の方乳母の女房にかきくどきのたまひけるは、「あはれや、明日うち出でんとての夜、さしもいくさの庭に、わらはを呼びて、『さても、通盛がはかなき情に、都のうちをさそはれ出でて、

3'されば『水の底に沈ませ給へば』とて、亡き人を見まゐらせ給はんこと難かるべし。げにもさ様にさぶらはば、わらはをもいづくまでも召しこそ具せられさぶらはめ」と申しければ、

- 4 「横笛」・「副将被斬」においては、古典平家・天草版平家ともに引用例文は一致し、「わらは」

は「varaua」である。

ここで「わらは・varaua」・「vatacuxi」に関する記述を文典・辞書から見ることにしたい。

まず「わらは・varaua」には、『古語大辞典』（小学館）の語誌に次のような記述が見られる。

女性の自称に「わらは」を用いるようになったのは、鎌倉時代以降のようである。召し使われる童子・童女が「わらは」と呼ばれたので、その童子・童女が自分を「わらは」と称して主君に対することはあり得る（のちの例だが、御伽草子で、一寸法師が自称に用いている）。それが一般化して、若い女性の謙遜の自称詞となったのであろう。平家物語の諸例は、皆若い女性の発話である。（後略）

また、『日葡辞書』（1603年～1604年刊 長崎）には、簡明に Varaua 私 婦人語と見える。1604年～1608年長崎で刊行されたロドリゲス編『日本大文典』には、Vagami（わが身）・Midzucara（自ら）とともに、Varaua（妾）が、女が使ふ。1620年にマカオで刊行されたロドリゲス編『日本語小文典』にも上記の3語が、〈私〉。女性の用いる代名詞として見られる。

「vatacuxi」には、『古語大辞典』の「わたくし」の語誌が注目される。

中古から中世期ごろまでの用法は、すべて漢語の「公私」の観念に支配されている。「私」の和訓として「わたくし」が採用される以前から「わたくし」が「おほやけ」の対義語として存在したか否かは未詳。公人としてではない—私人を指す意から、転じて一個人として自己をたゞちに「わたくし」と呼び、自称の代名詞となったのは、中世後期からであったようである。

また『日葡辞書』には、Vatacuxi 私 だけでなく、Vye, Vatacuxi（上、私）主君と臣下と、または、主君と私と、Vatacuxina cotouo yū（私な事を言ふ）権威もなければ公には価値もない自分自身のこととか、自分の意見とかを言う。が見られる。『日本大文典』には、vatacuxi は次のように記されている。

Vare（われ）・Varera（我等）・又は Vareraga（われらが）・Vatacuxi（私）・Soregaxi（それがし）。これらは丁寧な形であって、尊敬し又謙遜して話すのに用ゐる。普通は男に用ゐられる。初の二つは話しことばと書きことばに、次の二つは話しことばにだけ使ふ。

○ Vatacuxi（私）は往々個人とか彼自身とか特定とかの意味を持つ事がある。例えば、Vatacuxino coto（私の事）は、個人の事とかあなただけの事とか彼だけの事とかの意である。『日本語小文典』には、Vatacuxi（私）は、Vare（我）、Varera（我ら）とともに、〈私〉、丁寧・謙遜の代名詞。と簡明な記述が見られる。

上記のような「わたくし・vatacuxi」の様子を、『平家物語』（古典平家・天草版平家）で見ておくことにしたい。

高野本には16例の「わたくし」が見られるが、天草版平家の例も一緒に5例示しておく。

- 1 新大納言成親卿は、山門の騒動によって、私の宿意をばしばらくおさへられけり。（巻第二 西光被斬）

天草版平家 その折しも比叡の山にむつかしいことができたによって、成親卿わ vatacuxi の宿意をしばらくわとどめられてござった。（巻第一第三 成親卿位あらそいゆえに、平家に対し

謀叛を企てられたことが顕れ、その身をはじめ、くみしたほどのもの搦め取られ、そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと.)

- 2 宰相あまりのうれしさに、御使に私の使をそへてぞ下されける。(巻第三 赦文)

天草版平家 宰相殿わあまりのうれしさにをいに vatacuxi の使いをそえて下された。(巻第一第十 鬼界が島の流人を許さるるについて、あとに残らるる俊寛の悲しみ深いこと.)

- 3 便宜をうかゞふてこそあらめ」とて、わたくしには思ひも立たず、宮をすゝめ申たりけるとぞ、後には聞えし。(巻第四 競)

天草版平家 詮ずるところわ便宜をうかがうでこそあらうずれと言うて、いられたほどに、なましいに vatacuxi にわえくわたてられず、宮をすすめまいらせられたときこえた。(巻第二第三 三位入道の嫡子仲綱馬ゆえに面目を失われたことによって、この恥をすすがうずるとて、謀叛ををこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと.)

- 4 三位中将の使は、平三左衛門重国、院宣の御使は、御坪の召次花方とぞ聞えし。私の文はゆるされねば、人々のもとへも詞にてことづけ給ふ。(巻第十 内裏女房)

天草版平家 三位の中将のお使いにわいにしえ召し使われた重国をつかさわされた。(中略) 北の方えもを文をつかわされうと思われたれども、vatacuxi の文わ許されねば、(巻第四第十一 重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと.)

- 5 頼朝が私のかたきならばこそ。朝敵としてあづかりたてまつたる人なり。(巻第十 千手前)

天草版平家 頼朝が vatacuxi の敵でありながら、すでに朝敵となる人なれば、(巻第四第十二 重衡のあづま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰)

これらの「私・vatacuxi」は、自称詞ではなく、〈私的な、個人の〉を意味するものである。天草版平家に見られた前述の自称詞「vatacuxi」とは異なるものである。古典平家には自称詞としての「わたくし」はまだ見られない。

ここで、天草版資料として『天草版平家物語』と並ぶ『天草版伊曾保物語』(1593年刊 イエズス会天草学林)に見られる vatacuxi の用例を示しておくことにする。8例の vatacuxi は、自称詞である。

- 1 イソポ→主人さあらば又某にこの讒言を申し掛けた人々にも vatacuxi が如くに仕れと仰せ付けられいかし。(イソポが生涯の物語略)
- 2 イソポ「件の両人が悉く存じ尽いたによって、vatacuxi が存ずるために何も残りませぬ」と答えたところで、(同上)
- 3 イソポが言うは、vatacuxi が只今知らぬと申した事は、かやうに籠者せられよう事を弁えなんだによって、知らぬとは答えてござる」と言うたれば、(同上)
- 4 某申し当てたならば、諸人御身を崇敬致さうず、若し申し損ずるとも、vatacuxi 一人の不覚でこそござらうずれ」と言え、(同上)
- 5 「只今各々 vatacuxi を欺かせらるる事はその謂れがない。破れた衣裳を着た君子もあり、藁屋の内に貴人の坐せらるる事もあるもの」と言え、(同上)

- 6 只今の某は少しも隔てがござない。vatacuxi は総じて人の仇を仕らず、ただ道理の推すところを人に教ゆるばかりでござる。(同上)
- 7 vatacuxi はこの道を教わるより外、別の犯しもござない。(同上)
- 8 鶏→狐まづその辺りに召し置いた vatacuxi が隨身を起させられい」と。(鶏と、犬の事)

4 対称詞

古典平家物語・天草版平家物語(祇王・Guiuō 章段を中心にして)の対称詞「わごぜ」・「vagoje」・「fonata」を見ることにする。

卷第一「祇王」に出現する「わごぜ・わごぜたち」11例を、順に示すことにする。(高野本)

- 1 入道、「いでいでわごぜがあまりに言ふ事なれば、見参してかへさむ」とて、つかひを立てて召されけり。
- 2 入道もおもしろげに思ひ給ひて、「わごぜは今様は上手でありけるよ。このぢやうでは、舞もさだめてよかるらむ。一番見ばや。つゞみうち召せ」とて召されけり。
- 3 母とち重而教訓しけるは、「～それにわごぜは、此三とせまで思はれまいらせたれば、ありがたき御情でこそあれ。
- 4 縦都を出さるとも、わごぜたちは年若ければ、いかならん岩木のはざまにても、過ぎさん事やすかるべし。
- 5 母とち～なくなく又教訓しけるは、「まことにわごぜのうらむるもことほなり。さやうの事あるべしとも知らずして、教訓してまいらせつる事の心憂さよ。
- 6 但わごぜ身をなげば、いもうともともに身をなげんと言ふ。
- 7 佛御前、涙を押さへて、「～わごぜの出だされ給ひしを見しにつけても、いつか我が身の上ならんと思ひしかば、うれしとは更に思はず。(高野本は、傍線部を欠く。葉子十行本で補う。)
- 8 祇王なみだをおさへて、「誠にわごぜの是ほどに思給けるとは、夢にだに知らず。憂き世中のさがなれば、身の憂きとこそ思ふべきに、
- 9 ともすればわごぜの事のみうらめしくて、往生の素懐をとげん事かなふべしとおほえず。
- 10 今わごぜの出家にくらぶれば、事のかずにもあらざりけり。
- 11 わごぜはうらみもなし、なげきもなし。

続いて天草版平家における該当箇所を、同じように出現順に示す。

- 1 清盛 vagoje が余り言うことぢやほどに、見参をして帰さうずるとあつて、使をたてて召された。
- 2 清盛も面白げに思われて、vagoje わ今様わ上手ぢや：この体でわ舞も定めて良からうず：一番舞うほどに鼓打ちを呼べと言うて召された。
- 3 そのうえ vagoje わ三年まで思われまらしたれば、有難いことでこそあれ：
- 4 たとい都を出さるるとも、vagoje tachi わ年が若ければ、何たる岩木のはざまでも過ぎすこ

とがやすからうず。

5 まことに vagoje の恨みもことわりぢゃ：さやうのことがあらうとも知らいで、教訓して参らせたことの心憂さよ：

6 ただし vagoje 身を投げば妹の祇女もともに身を投げうと言う。

7 fonata の出されさせられたを見たにつけても、いつかわが身の上であらうと思うたれば、嬉しゅうわなうて、

8 祇王誠に fonata のこれほどに思いあるとわ、夢にも知らいで、うき世の中のあさましさわわが身をこそ憂しと思をうことぢゃに：

9 ともすれば、fonata のことが恨めしゅうて、往生の素懐を遂げうずることもかなわうとも覚えず。

10 今 fonata の出家に比ぶれば、ことのかずでもない。

11 fonata わ嘆きもなし、恨みもなし。

引用文1~6の「わごぜ・わごぜたち」は「vagoje・vagoje tachi」に呼応し、引用文7~11までの「わごぜ」は「fonata」に対応している。

以上の「わごぜ・わごぜたち = vagoje・vagoje tachi」「わごぜ = fonata」は、すべて「祇王・Guiuō」章段に見られるものである。

もう1例の「わごぜたち = vagoje tachi」が、巻第十「首渡」に見られる。

12 北方なくなく御返事かき給ふ。若公・姫君筆をそめて、「さて父御ぜんの御返事は、何と申べきやらん」と問給へば、「たゞ、ともかうもわ御前たちの思はんやうに申すべし」とこそその給ひけれ。

この当該箇所は天草版では、次のように見られる。

12 若君姫君も筆を染めて、さてを返事わ何と書かうぞと仰せらるれば、北の方ただともかうも vagoje tachi の思わうずるやうに書けと仰せられたれば（巻第四第十 都で平家の一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰）

小松三位中将維盛卿の北の方が、子に対して用いる対称詞は、古典平家「わ御前たち」、天草版平家「vagoje tachi」と呼応していることになる。

「祇王・Guiuō」章段に集中して出現した「わごぜ・わごぜたち」「vagoje・vagoje tachi・fonata」11例を出現順に整理しておく。

「祇王・Guiuō」章段の対称詞

		古典平家	天草版平家	
第一区分	1	わごぜ	vagoje	清盛→祇王
	2	わごぜ	vagoje	清盛→仏
第二区分	3	わごぜ	vagoje	母→祇王
	4	わごぜたち	vagoje tachi	母→祇王
	5	わごぜ	vagoje	母→祇王
	6	わごぜ	vagoje	母→祇王
第三区分	7	わごぜ	fonata	仏→祇王
	8	わごぜ	fonata	祇王→仏
	9	わごぜ	fonata	祇王→仏
	10	わごぜ	fonata	祇王→仏
	11	わごぜ	fonata	祇王→仏

※仏御前はすべて仏とする

古典平家（葉子十行本を含む）の、相手を親しんで言う接頭語「わ」を持つ「わごぜ・わごぜたち」は、話す相手によって異なるところがない。一方天草版平家の対称詞は、清盛あるいは母とちが、祇王・仏に対する時は、「vagoje・vagoje tachi」のように古典平家と同じであるが、仏あるいは祇王が、互いに用いる対称詞は「fonata」と変化している。口語訳にすれば「わごぜ・わごぜたち」は、「お前・お前たち」、「fonata」は「あなた」と言うところであろう。

ここで「Guiuō」章段以外に出現する天草版平家の「fonata」の用例もすべて見ておくことにする。対応する古典平家（高野本）の用例も一緒に示す。

- 1 その時少将の申さるるわ：まことにさこそ思し召すらう。われらが召し帰さるる嬉しさわさることなれども、fonataの御風情を見をき奉れば、行く空も覚えねども、（巻第一第十 鬼界が島の流人を許さるるについて、あとに残らるる俊寛の悲しみ深いこと）

古典平家 我等が召しかへさるゝうれしきはさる事なれ共、御有様を見をき奉るに、巻第三足摺 対称詞「そなた」が見られない。天草版平家の「fonata」は、誰の「御風情」かを明確に示している。対称詞を挿入するに際しては、新しい当時の日常語 fonata を当てている。fonata については『日葡辞書』（1603年～1604年刊、長崎）には、「あなた、あるいは貴殿」とあり、ロドリゲス『日本大文典』（1604年～1608年刊、長崎）には、「丁寧で広く行はれる」と、ある。当時の新しい fonata を、少将成経は軽い敬意をもって俊寛に用いていることになる。

- 2 ただし藏人殿こそ fonata を恨むる事があると言うて、これにいられたをそれがしがかかえまらしたによってか？（巻第三第二 平家木曾をほろぼさうとて、北国え下らるれば、そのうち

に木曾と、頼朝不和の事があったけれども、ついに和睦せられたこと：また木曾殿が火打城にを
かれた斎明威儀師謀叛を起し、平家の味方してその城をとらせたこと)

古典平家 但十郎藏人殿こそ、御辺をうらむる事ありとて、義仲が許へおはしたるを 卷第
七 清水冠者 「そなた」ではなく、同輩またはやや目上に対して武士が用いる対称詞「御辺」
が用いられている。

- 3 右馬 ちっとも fonata にただ口わをかせまいぞ：なを先えお語りあれ。(卷第四第七 能谷
と、平山と一の谷え押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと)

古典平家には見られない。天草版平家独自の対話形式冒頭部分。右馬の允が喜一檢校に対す
る対称詞 fonata — vocatariare の呼応は、ロドリゲス『日本大文典』で言う、「少し目下に当る
者と話す場合に使う話し言葉では極めて広く行われる言い方である。例えば、Voyomiare,
Voagueattaca? Vonaraiarōca?」にあたる。

- 4 いづちを西とわからねども、月の入るさの山の端を fonata かと伏し拜うで、静かに念仏召さ
るれば(卷第四第十 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと)

古典平家 いづちを西とは知らね共、月の入るさの山のはを、そなたの空とや思はれけん、
しづかに念仏したまへば、(卷第九 小宰相身投) fonata = そなた = 西方浄土の方角

以上天草版平家の「fonata」は、「小宰相身投」の「fonata」以外は、対称詞である。

続いて古典平家(高野本)に出現する「そなた」の用例を見る。「高野本」には4例の「そなた」
が出現している。対応する天草版平家の用例も一緒に示す。

- 1 備中の瀬尾と、備前の有木の別所の間は、はつかに五十町にたらぬ所なれば、丹波少将、そ
なたの風もさすがなつかしうや思はれけむ(卷第二 阿古屋之松)

天草版平家 少将吹きくる風までをも懐かしう思い、とあり、「fonata」は出現しない。卷第
一第七 成親卿と、その子少将流罪に行われたこと

- 2 まことや法輪は程ちかければ、月の光にさそはれて参りたまへる事もやと、そなたに向ひて
ぞあゆませける。(卷第六 小督)

天草版平家 欠落

- 3 人知れずそなたをしのぶこゝろをばかたぶく月にたぐへてぞやる(卷第九 三草勢揃)

天草版平家 欠落

- 4 いづちを西とは知らね共、月の入るさの山のはを、そなたの空とや思はれけん、しづかに念仏し
たまへば(卷第九 小宰相身投)

天草版平家 いづちを西とわからねども、月の入るさの山の端を fonata かと伏し拜うで、静
かに念仏召さるれば 卷第四第十 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこ
と そなた = fonata = 西方浄土のある方角

「高野本」に見られる上記4例の「そなた」は、前出の天草版平家で見られた「fonata」とは異な
る。天草版平家の「fonata」は対称詞である。古典平家には人称代名詞としての「そなた」は、い
まだ見られないと言えよう。しかし例文3(三草勢揃)の「そなた」は、「貴地=あなた(二位僧都

全真) のいる方角」を意味し、対称詞的なニュアンスを感じさせるものがある。対称詞の萌芽を見ることができよう。

上記の「fonata」・「そなた」を整理しておく。

fonata	古典平家 (高野本)
1 卷第一第十	／ 卷第三 足摺
2 卷第三第二	御辺 卷第七 清水冠者
3 卷第四第七 (右馬之充)	／ (卷第九 一二之懸)
4 卷第四第十	そなた 卷第九 小宰相身投 (西方浄土のある方角)

そなた	天草版平家
1 卷第二 阿古屋之松	／
2 卷第六 小督	／
3 卷第九 三草勢揃	／
4 卷第九 小宰相身投	卷第四第十 fonata (西方浄土のある方角)

ここで「fonata」について検討をさらに加えていくために、天草版資料として『天草版平家物語』と並ぶ『天草版伊曾保物語』(1593年刊 イエズス会天草学林)に見られる「fonata」の用例を参考にしたい。なお『コリヤード懺悔録』(1632年刊 ローマ)に1例見られる「fonata」も示しておく。

最初に1例見られる『コリヤード懺悔録』の例を示す。

○二番の御掟に就いて、fonataも立て、人にもさせあつた空誓文で他人受けられた損・仇をば、つい直さいで叶はぬ。子細はそれをせいで科の御赦し曾てござるまい。

続いて『天草版伊曾保物語』の13例全てを示す。

- 1 女房は返事にも及ばず噤すんで居たが、腹こそ立つつらう。「いかにシャントお聞きあれ、fonataと我は縁こそ尽きつらう。今よりして夫と頼みまらすまい。(イソボが生涯の物語略)
- 2 (シャント)女中に言わるるは、「いかに妻、ただし御身も、我も酔狂か?夢と現とも覚えぬものかな?さきの雑餉をばfonataにこそ贈つたれ。(同上)
- 3 (下心)人より恩を蒙つては、fonataもそれを報じよう志をお持ちあれ:恩をも知らぬ者は蟻虫にも劣ると言う事ぢゃ。(鳩と、蟻の事)
- 4 (あるじ)「~躬が一七日の間洗い清めよう程のものをfonataの一時召されよう事を以つて、汚されようずれば、(炭焼と、洗濯人の事)
- 5 (或る人)嘲つて言うは、「御辺の氣遣いは無益ぢゃ。fonataの賢い謀を以つてその悲しみをお宥めあれ。(貪欲な者の事)
- 6 さてfonataの心には、黄金ぢゃと思ひおなしゃれ:(同上)

- 7 (狐)「いかに勝れて気高い装いなるお方へ申さうずる事がある。fonata のお声をばやがて承り知った」(驢馬と、狐の事)
- 8 驢馬から馬に侘び言をして言うやうは、「fonata と、我は一門で、そっとの高下を以って隔たった：(馬と驢馬との事)
- 9 少し fonata の上に付けて我を助けられいかし」と：(同上)
- 10 二人同じやうに歩いて行くところに、一人斧を見付けて拾い取るところで、ま一人の言うは、「fonata の一人のにはせまじい：(二人同道して行く事)
- 11 斧を拾うた者「なう同心した人、なぜに fonata は力をお添えやらぬぞ」と言えば、(同上)
- 12 野牛狼に言うは：「とても我只今 fonata から食われようず：しからは多年好いた道であれば、最期に一奏で舞うて死なうず。(野牛と、狼の事)
- 13 或る蠅一つ獅子王の所に行つて「fonata は躬よりも強うはない：それによつて某は貴所を物とも思わぬ：(蠅と、獅子王の事)

上記の「fonata」は、すべて対称詞である。「fonata」と称される関係の範囲の広さが注目される。さて「Sonata」に関する記述を文典・辞書から見ることにする。

ロドリゲス『日本大文典』(1604年～1608年刊、長崎)には、「Sona fō, Sonata, Conata は丁寧で、広く行はれる」と記載されている。文典中には、Sonata の仰せらるる言葉、Sonata の御座る處は、等と、用例も数多く見られる。ところがロドリゲス『日本語小文典』(1620年刊、マカオ)には、「Sonata」についての積極的な記述が見られない。上巻の「基本代名詞、派生代名詞、所有代名詞についての〈二人称〉」に、Sonata は見られるが、注記がない。下巻の「代名詞(使用頻度の高い代名詞)」には、Sonata は見られない。『日本大文典』で見られた Sonata の記述も見られない。Conata については、尊敬の代名詞として記載されている。またコリヤード『日本文典』(1632年刊、ローマ)には、「同等の人又は幾分目下の人と語る場合には、fōnata, fōno fō, vāre sāma の中の一つを用いる」とされている。

1604年(『日本大文典』)から1632年(『日本文典』)にかけて、日本国内外で出版されたこれらの文典に記載される「Sonata」を見ると、言葉の変化が著しい当時であつては、対称詞の敬度が高下したり、新たな対称詞が加わったりすることも、あり得ることと思われる。ロドリゲスの「丁寧で、広く行はれる」の記述からは、一般的に使用される身分の高下にかかわらない敬意は、次第に失われていく方向にあることが示唆されていることを読みとることができる。なお『日葡辞書』(1603年～1604年刊、長崎)の「Sonata」には、「あなた、あるいは、貴殿」とある。ちなみに「Vagoje」については、「おまえ」の意で、話す相手をいくらか軽しめて言う」と見られる。

「Guiuō」章段においての清盛→祇王・仏への「vagoje」、母とち→祇王への「vagoje」は、辞書記述に適合するものである。一方、祇王と仏の関係は、「vagoje」を脱して、「fonata」の関係にあることになる。中古頃までは対称詞の数が比較的少なかったが、中世に入ると数も多くなり、ニュアンスの多彩さが注目されるようになった。『天草版平家物語』の「fonata」もその一翼を担うものである。

ここで祇王・仏間に見られる対称詞「fonata」を吟味しておきたい。前掲の引用文を再度提示し、述部に注目する。

- 7 仏→祇王 fonata の出されさせられたを見たにつけても、いつかわが身の上であらうと思ふたれば、嬉しゅうわなうて、障子にいづれか秋にあわで果つべきと書きをかせられたふでの跡をげにもと思つて悲しゅう存じた。いつぞやまた召されさせられて今様を歌わせられたにも思ひ知られてこそござつたれ。
- 8 祇王→仏 誠に fonata のこれほどに思いあるとわ、夢にも知らいで、うき世の中のあさましさわわが身をこそ憂しと思をうことぢやに：
- 9 ともすれば、fonata のことが恨めしゅうて、往生の素懐を遂げうずることもかなわうとも覚えず。今生も、後生もなましいにし損じた心地であったに：このやうに様をかえてをぢやつたれば、
- 11 fonata わ嘆きもなし、恨みもなし、今年わまだ十七にこそなる人が、これほど穢土を厭うて、浄土を願うと深く思いをいりあつたこそまことの大道心とわ見えたれ。

7は、仏→祇王 8・9・11は、祇王→仏の「fonata」である。

『日葡辞書』の「Sonata」には、「あなた、あるいは、貴殿」とあり、「Vagoje」には、「おまえの意で、話す相手をいくらか軽しめて言う」とある。祇王と仏間の対称詞が、古典平家の「わごぜ」から脱して「fonata」の関係を見せるのが天草版平家である。上記の例を見ると、仏→祇王への待遇は高く、祇王→仏への待遇度の低くさが注目される。「fonata」が「広く行はれる」対称詞であるためである。「fonata」が絶対的な上位者に対する対称詞ではないために、述部に多様性が見られることになる。祇王と仏の置かれた環境差が、「fonata」と呼応する述部に反映され、両者の関係をより深く把握することができる。

5 おわりに（まとめとして）

これまでに述べてきたことの要旨を箇条書きにして、まとめておく。古典平家物語（高野本）と天草版平家物語「祇王・Guiuō」章段に見られる仏の自称詞「わらは・vatacuxi」と、対称詞「わごぜ・fonata」を中心に吟味したものである。

- 1 古典平家では仏の自称詞は「われ」1例を除けば、「わらは」のみである。どのような状況においても変化することがない。「わらは」が自称詞としてすべての場面に対応している。一方天草版平家では、「わらは = varaua」のみではなく、新しい「vatacuxi」が見られる。状況に応じて、vatacuxi — varaua — vatacuxi と自称詞に変化が見られる。編者不干ハビヤンの自称詞の配置に工夫が見られるところである。この vatacuxi についてロドリゲス『日本大文典』には、次のように記している。Vare, Varera, 又は Vareraga, Vatacuxi, Soregaxi, これらは丁寧な形であつて尊敬し又謙遜して話すのに用ゐる。

清盛・祇王に仏が用いる自称詞は、上記のものである。

- 2 ロドリゲス『日本大文典』には続けて、「Vatacuxi」は往々個人とか彼自身とか特定とかの意味を持つ事がある。(例えば、Vatacuxino coto は、個人の事とかあなただけの事とか彼だけの事とかの意である。)と、記している。

「公」に対する「私」として用いられる「わたくし・vatacuxi」は、古典平家にも、天草版平家にも見られる。しかし古典平家には自称詞としての「わたくし」は、見られない。

- 3 古典平家には、「わごぜ・わごぜたち」の対称詞が見られる。清盛—祇王・仏、祇王の母—祇王間には「わごぜ・わごぜたち」が用いられている。祇王—仏間の対称詞も「わごぜ」である。一方天草版平家では、清盛・祇王・仏・祇王の母間の対称詞は、「vagoje・vagoje tachi」であるが、祇王・仏間の対称詞は新しい「fonata」に変化している。ロドリゲス『日本大文典』には、次のようにある。「Sono fō, Sonata, Conata: 丁寧で、広く行はれる。例えば、Conata coreuo gozonji naica?」

古典平家には見られない天草版平家の新しい fonata が注目される。

『日葡辞書』には、「Vagoje」については、「おまえ」の意で、話す相手をいくらか軽しめて言う。とあり、「Sonata」については、あなたあるいは貴殿、とある。

天草版平家の祇王・仏の関係は、「vagoje」= おまえを脱して、「fonata」= あなたの関係にあることを見せている。編者不干ハビヤンの選択の妙を見ることができる。

- 4 fonata がロドリゲス『日本大文典』に言う。「丁寧で、広く行はれる」ために、述部に多様性が見られる。祇王→仏の待遇度は低く、仏→祇王の待遇度は高い。新しい「fonata」は、祇王と仏間の置かれた環境差を、述部に反映させていることになる。
- 5 この論文では、原本の「r」はすべて「f」とした。

参考図書

- 梶原正昭・山下宏明校注(1991・93)『平家物語 上・下』新日本古典文学大系 岩波書店
富倉徳次郎校註(1949)『平家物語 上・中・下』日本古典全書 朝日新聞社
水原一校注(1979)『平家物語 上・中・下』新潮日本古典集成 新潮社
江口正弘(1986)『天草版平家物語 対照本文及び総索引』明治書院
井上章編(1964)『天草版伊曾保物語』風間書房
大塚光信翻字(1961)『コリヤード懺悔録』風間書房
中田祝夫・和田利政・北原保雄編(1986)『古典大辞典』小学館
土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店
土井忠生訳(1969)『ロドリゲス日本大文典』三省堂
池上岑夫訳(1993)『ロドリゲス日本語小文典上・下』岩波文庫
大塚高信訳(1957)『コリヤード日本文典』風間書房

(2017年9月29日受理)